HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	樺太からの引揚者と戦後北海道 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	木村, 由美
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第15992号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92376
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Yumi_Kimura_abstract.pdf (論文内容の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：木村　由美

学位論文題名
樺太からの引揚者と戦後北海道

・本論文の観点と方法

1945 年 8 月 8 日、ソ連は日本に宣戦布告し、翌 9 日、国境を接する日本領南樺太（以下、樺太と記す）に侵攻し、日ソ戦争・樺太戦が 8 月 22 日まで行われた。約 40 万人いた在樺太日本人のほとんどは、日本に引揚げ、その多くは北海道に定着した。近年、これら外地（植民地）に在住していた日本人の戦後引揚げが研究者の関心を集めている。本論文は、外務省外交史料館所蔵資料、国立公文書館所蔵資料を本格的に用いて統計数値を作成しながら引揚げとその後の定着過程を明らかにした研究である。さらに、申請者が長年行ってきた引揚者へのインタビューや、引揚者により書かれた手記・回想を活用することによって、個人史をも踏まえた引揚研究となっている。また、国立公文書館所蔵『引揚者在外事実調査票』が 1956 年時点までの引揚者の事実を記録していることから、本論文では、引揚げ後の定着過程をも明らかにすることができた。申請者は引揚げ研究を戦後史につなげようと意図している。

・本論文の内容

序章では、樺太からの引揚げは時期・方法により 3 区分されることを示した。「緊急疎開」は 1945 年 8 月 9 日のソ連侵攻からソ連による海上封鎖（8 月 22 日）まで行われ、主に老幼婦女子約 7 万 6000 人が北海道（稚内港）に移動した。「脱出」は「密航」ともいわれ、ソ連の海上封鎖後に監視の目を盗んで約 2 万 4000 人が脱出した。「公式引揚」は米ソ両国の合意に基づき、1946 年 12 月に始まり、1949 年まで行われ、約 26 万 8000 人が引揚げた。樺太からの引揚者の 6 割以上が北海道に定着した。引揚者の定着過程を明らかにすることにより、戦後北海道史を再検討することが可能となる。

第一部では樺太から北海道への引揚げの実態を検討している。第一章では、「脱出」について、外務省外交史料館所蔵の「密航脱出一覧」を用いて分析した。それにより南部の住民は亜庭湾東西両端あるいは、樺太西海岸から出港し、北部の住民は南部に移動してから出港したこと、海流の影響を受けて北海道の稚内からオホーツク海沿岸に上陸したこと、漁業者に限らずあらゆる職業の人々が、大小さまざまな船を用いて「脱出」したことを明らかにした。第二章では、南部の漁村・深海村から北海道への引揚げの実態を明らかにしている。深海村の引揚者は、「緊急疎開」と「脱出」で引揚げる者が多く、稚内市など上陸地または炭鉱

都市へ定着していった。公務員の再就職状況をみると、郵便局員と教員は引揚げ後も同じ職に就く傾向がみられたが、役場吏員は同じ職に就くことが難しかったことが明らかとなった。第三章では、大泊町から北海道への引揚げについて検討した。この分析により、これまで統計資料が皆無であった「緊急疎開」についても数値が明らかになった。大泊町では半数以上が「緊急疎開」により引揚げた。また、引揚者の回想では「緊急疎開」における軍、官、警察関係家族の優先乗船が批判されてきたが、大泊町の分析結果にはそのような事例はみられなかった。第四章では、北西部に位置し激戦地となった恵須取町から北海道への引揚げについて検討した。恵須取町ではソ連の指定する重要産業が多かったため、「公式引揚」の期間でも遅い時期に引揚げている。深海村や大泊町と違い、恵須取町だけにみられた現象として、世帯主が家族を樺太に残し「脱出」する、というものがある。これは、恵須取町では日本で唯一、義勇戦闘隊がソ連軍と戦闘したことから、ソ連側が元隊員を逮捕する可能性があったことが背景にあると推測される。

第二部は、戦後北海道における引揚者について検討した。第五章では、引揚者が多く定着した、都市部と炭鉱都市を中心に、樺太引揚者の状況や、樺太と北海道との連続性を明らかにした。札幌市と旭川市では、旧兵舎や廃材を利用した引揚者住宅が形成されたが、老朽化した住宅はスラム街と化した。しかし、その後の再開発を経てモダンな公営住宅街となっていった。引揚者住宅は都市の住宅街形成の契機となったものと思われる。都市部では日雇に従事する者がみられたが、職と住宅を手に入れられる炭鉱にも引揚者は定着した。都市部や炭鉱都市は引揚者が多く定着し、引揚者は樺太時代のコミュニティを継続したといえる。第六章では、深海村、大泊町、恵須取町、豊原市の四市町村の『引揚者在外事実調査票』を集計しながら、北海道における引揚者の定着状況を明らかにした。四市町村では引揚げ時期に大きな違いがあった。また都市部からの引揚者は都市部へ定着する傾向がみられた。都市部や炭鉱都市へ定着した引揚者は、一度他の地域へ引揚げたのちに移動して来る傾向があった。引揚時期では、「緊急疎開」の引揚者は道北（稚内市、旭川市）への定着がみられ、先に引揚げた世帯員が、後から引揚げて来る家族を引き寄せていることが明らかとなった。都市部では公務や商業への就業がみられ、日雇もみられた。漁業者は道北やオホーツク海沿岸へ定着していった。終章では、各章の内容をまとめるとともに、樺太は 1943 年「内地化」されたにもかかわらず、戦後、樺太からの引揚者は外地からの引揚者として扱われたことを指摘した。